

2016 年度世界展開力強化事業

中南米との大学間交流プログラム（短期留学） 帰国報告書

地域環境科学部 生産環境工学科 2年 学籍 No. 41415016 上野 円

私はこの度、2016年度世界展開力強化事業（中南米との大学間交流プログラム ペルー短期留学）に参加し、本プログラムの帰国報告書をここに提出する。

まず初めに、私が本プログラムに参加した目的は、大きく分けて2つある。

一つ目の目的は海外の農業を直に学びたい、というものである。この目的は、正確に述べると、『気候や社会的環境が大きく異なる南米ではどの様に農業が行われているのか』を学び、そして知りたいというものである。この目的を持ったきっかけとして、私が所属しているサークルがある。私は東京農業大学のサークル『緑の家』に所属し、サークル活動として畑をお借りし、野菜を生産している。また、その活動の一環として農家の方のお世話になったり、小笠原諸島母島や長野県佐久穂市などで実習等をさせて頂いている。私は、これらの活動を通して日本農業の一端を実学的に学んできた。その中で、日本の農業と異なる海外の農業について、私は関心を抱き、実際に見てみたいという思いから本プログラムに参加した。

二つ目の目的が、海外の方との交流及び、文化・風習を学ぶことである。非常にありき

たりな目的であるが、今まで海外への渡航経験のない私にとっては大きな目的のひとつであった。今回のプログラムでは、現地での学生交流やホームステイなども研修内容に含まれており、この機会を是非とも生かしたいと考えていた。また、環境が異なる国・地域においてどのような文化や風習、それらが人に及ぼす影響などにも興味があり、是非とも知ってみたいとも考えていた。

さて、この二つの目的を持って、私は2016年度世界展開力強化事業中南米との大学間プログラム（ラ・モリーナ大学短期留学）に参加した。次に、本プログラムでの活動とその内容について記す。

今回のプログラムの活動は、ペルー内の リマ・カハマルカ・プカルパ で主に行われた。そして、それぞれの地域で、充実した体験をさせていただいた。そこで、各地域での活動を簡単にではあるが以下にまとめる。



リマ

ペルーの首都であり、東京農業大学の協定校 ラ・モリーナ大学 がある海岸に面した都市である。特徴としては、砂漠の中に都市が存在し、降水もここ10年間確認されていないが、朝霧が発生しやすく、乾燥はしてない。

活動内容は、学生交流・講義及び研究室訪問・リマ観光などであった。そして、今回リマでの活動において、ラ・モリーナ大学と現地学生の非常に協力が大きい。

ラ・モリーナ大学側が昼食会など、多くの交流の機会を用意して頂いただけでなく、大学内に保有する圃場の案内や研究室訪問の際でも英語で対応もしくは、英語に訳せる学生を同伴させて頂くなど細やかな気遣いを多くして頂いたことには、感謝の念が絶えない。

また、講義（今回は簡単なスペイン語講習とペルーの風土、チリペッパーについて）や研究内容（キヌア等）についても、非常に興味深いものばかりであった。このことを通して、自然環境や研究環境について、直に知ることができた。

また、現地の学生が右も左も知れない私たちに対して大変親切にして頂いた。

しかしながら恥ずかしいことに、私は現地の公用語であるスペイン語の初歩も危ういものであったため、拙い英語ではあるが会話をさせて頂いた。それに対しても、ラ・モリーナ大学の学生はとても親切に応じてくれた。現地の学生の皆さんとの一番の思い出は最終日に連れて行って頂いた食の祭典『ミスツウーラ』である。ペルー各地の食、そして、世界各国の代表する料理が一同に会するこの祭典を、現地の学生に案内されながら舌鼓をうつ。どれをとっても、おいしいものがばかりで、チリペッパーや魚介、いくつもの種類の肉を使っている料理など改めてペルーの食の豊かさに驚かされた。現地の学生とも会話し

ながら、非常に楽しい時間を過ごさせていただいた。最後は空港まで見送りのお世話になり、大変お世話になった。

リマにて私は二つ目の目的である海外の方との交流の機会を多く持つことができた。そして、その機会を設けてくださったラ・モリーナ大学、現地学生に深く感謝する。

カハマルカ

カハマルカはペルー北部のアンデス山脈の盆地に位置する都市であり、インカ帝国が滅んだ場所。標高は 2750m、8月の平均最低気温は 3.6 度、短期留学中最も環境が厳しい地域である。ここでは、ホームステイ先のエドガー・ジャスミン夫妻に大変お世話になった。滞在は 4 日程であったが、どの一日をとっても非常に充実したものであった。

まずなによりも、滞在中何から何までお世話になったエドガー・ジャスミン夫妻とご家族に心からの謝辞を。カハマルカでの活動は長時間の移動が多く、その車の運転、加えて食事の用意など本当に多くのことをしていただいた。

そして、この多大な御協力によりカハマルカでは多くの素敵な経験を積むことができた。ここでの活動は、キヌアを含むスーパーフーズのプロジェクト・牧場見学・金鉱見学・メルカード見学、を行った。

その数多くの活動の中で、私をもっとも記憶に色濃く残っているのは、ペルー高地特有の壮大な風景と人々の暮らしである。牧場見学の際に見た、真っ青な空にどこまでも続く丘陵地帯。奥にそびえる広大な山々。そして、まるで緑色の絨毯のような牧草が一面にひかれていた山の腹。そこから、眺める満天の星空は一生忘れることのできないほどすばら

しいものだった。そして、暮らしている方々の生活を聞くことや、家の中に入れさせていただき、お食事をご馳走になったこと。直に観察し、とても貴重な体験をできたことがカハマルカでの一番の思い出である。

また、キヌアを含むスーパーフーズの実験場の様子や、プロジェクトに参加されている方々からのお話はとてもすばらしいものであった。例えば、プロジェクト責任者の方が、どのような点においてスーパーフーズが優れているのか、プロジェクト設立の背景や現状、など懇切丁寧に説明して下さった。さらに、プロジェクトと国が支援しキヌアを生産している農家の方のお話を実際に生産している畑で直接お話をお聞きできるなど非常に充実したものであった。

この充実した4日間の中では、聞くことを意識しての行動を行った。カハマルカでの農業や風習、どれも新鮮なものばかりであり、そして、興味深いものばかりであった。エドガー・ジャスミン夫妻も親切に質問に答えてくださり、一・二の目標共に達成できるものであった。

プカルバ

私は参加するまで、ペルーと言えば、ナスカの地上絵・クスコのマチュピチュなど、砂漠やアンデス地域が主なイメージであった。しかし、実際はペルーの国土の約6割がアマゾンで占められている。今回、本プログラムで訪れたのはプカルバ、アマゾンのジャングル地帯、アマゾン川流域に位置する都市である。

ペルーの国土は日本とはかなり異なるものだ。そのように感じられたのは、首都リマか

らプカルパまでのフライトである。リマの沿岸地帯の砂漠から、アンデス山脈の高地を通過、すると、そこには見渡す限りに濃い緑色のジャングルとそれを縫うかの様に巨大な川が流れている。ほんの1,2時間のフライトで小さな窓から見える外の景色が刻々と変わってゆく。それを観察しながらラ・モリーナ大学での講義でお聞きした様に、ペルーは数多くの気候を持っていることをはっきりと理解できた（修正）。

ここでの活動は、主にカムカム協会の鈴木さんにお世話になった。

プカルパでの主な活動は、カムカム協会の鈴木さんのご案内での、観光や農場見学である。鈴木さんに案内され、広大な農場を歩きながら説明されたことはとても興味を引く内容ばかりであった。特に驚かされたのはアマゾンの環境の豊かさである。生息する植物、それらを餌にする鳥類、昆虫の類が極めて多い。街中においてもそれは顕著に表れており、見ているだけで生態系の豊かさが見て取れた。

加えて土壌の豊かさにも驚かされた。なんでも、肥料はまかなくても食物が育つという。日本ではあまり考えられない手法だ。これも広大な土地と豊かさがもたらすものである。そして、鈴木さんの農場では、まさに実学的な研究・実験及び運営が為されていた。それら、一つ一つがどれも理にかなっておりとても興味深いものであった。

また、鈴木さんの今に至るまでのお話もまた非常に興味深いものばかりであった。東京農業大学に在籍中の時や、ペルーに来たきっかけや、ラ・モリーナ大学院時代のこと。当時、治安の非常に悪かった際の様子。その中でどのように運営を行ってきたのかなど。見るもの、聞くもの、感じるもの全てが私の常識外のことばかりであり、自分の視野の狭さを痛感させられた。

プカルパでは二つ目の目標を、12分に達成することができた。鈴木さんからお聞きできたペルーでの農業経営は私が当初考えていた以上に奥深く、積極的に質問を投げかけてしまったが、それら一つ一つに答えてくださり、どれもとても興味深いものであった。

上記において、リマ・カハマルカ・プカルパでの活動内容、そして、その時々で感じたことを私見ではあるがまとめてきた。私が本プログラムに最も感謝していることは、それぞれの地域において、まったく違う視点から環境や農業・産業含む様々な事について学び、直接見て、聞くことができたことである。

日本では考えられない文化・風習、息を飲むほどに言い表すことのできない数々の絶景、掛け替えのない人たちとの出会い。言い表すことのできない肌で感じ見て聞いたものすべてが、私が本プログラムを通して学んだ忘れられないものである。

さて最後に、このことを背景に、目標達成度の自己評価を行う。私は、本プログラムに参加するにあたって、最初に述べたような目標をたてた。その点で言えば、12分に果たせたと思う。しかしながら、今回参加して一番に痛感したのは私の力不足である。今年度参加した自分含め4名の学生、その中で最も目標と自身のモチベーションが低かったのは私であると、活動中感じていた。そして、ひしひしと自身の力不足を感じたのは私自身の英語力の低さである。短期留学先のペルー公用語はスペイン語である。しかし、ラ・モリーナ大学生や英語を話すことのできる方は、英語で対応してくださった。さらに、こちらがわかり易いよう簡単な英語で話してくださった。しかしながら、当の私は、幼稚な英語

と変な発音の単語を並べるばかりで、簡単なボディラングイッチとメモ帳頼りに対応する始末。この時ほど自身を恥じたことはない。

上述の理由から、現地での見つかった課題含めて、目標達成度の自己評価は6割5部とする。残り三割五部は、次このような機会を頂くまでの課題とする。

本プログラムに協力していただいた皆さんに心からの感謝を。そして、2週間の間行動を共にしてくれた、国際協力センターの山田さん、三名の学生にお礼を申し上げる。本当に本プログラムに参加でき私は幸せ者である。今後ますます努力を重ねていき、自らを高めてゆくつもりである。